(『国語学』第51巻2号　2000・9・30)

言語生活

沖　裕子

1. はじめに

ここしばらく言語生活の展望は，社会言語学の枠組みに従ってきた。今期もそれに倣って展望してみたい。展望子の観点から柱をやや整理しなおし排列した。以下，総論と言語観，位相・動態・方言接触，言語行動・言語選択，言語意識と言語政策・言語計画，応用言語学の順に概観し，今期の特色については最後にまとめることにする。敬称は省略に従った。なお，言語生活史については現代と関係するごくわずかの論にしか言及する余裕がなかった。また，談話文法，テキスト言語学は，言語行動・言語選択と関わるが，本紙展望の別項に譲る。

2. 総論と言語観

2.1　言語をどのように捉えるかについては，様々な論があった。関係する雑誌の特集号も多く編まれている。『日本語学』が臨時増刊号「複雑化社会のコミュニケーション」(17-11,1998.9，以後「複雑化」)，「日本人のコミュニケーション」(18-7,1999.6，以後「日本人」)を，『言語』が「今，最も熱い7つの言語観」(27-6,1998.6)，「ディスコース研究の射程」(28-1,1999.1，以後「射程」)を特集した。

荻野綱男「複雑化社会のコミュニケーション」(「複雑化」)では，現在のコミュニケーション行動が大きく変わりつつある要因を，国際化，情報化，対人関係の変化に求めている。徳川宗賢「コミュニケーション行動にかかわる学際的研究」(同上)は，現代社会の言語問題を列挙し，先学が築き上げてきた言語学だけでは対処が不十分だと述べ，学際的研究から新しい学問分野を追求する模索を望みたいとしている。徳川はまた，ことばの研究は「〈コトバの使用者が幸せになる〉ことに近付くために行うべきである」という態度を示し，J. V. ネウストプニーとの「対談 ウェルフェア・リングイスティクスの出発」(『社会言語科学』2-1,1999.9)の中で，言語問題の解決を図る力をもった研究者の出現を切望している。

J. V. ネウストプニー「コミュニケーションとは何か」(「日本人」)では，仕事，情報の取得，娯楽などという社会文化行動を加えた「インターアクションの社会言語学」を提唱した。室山敏昭『生活語彙の構造と地域文化――文化言語学序説――』(和泉書院，1998.3)

も，「文化言語学」を提唱するが，こちらは意味システムを文化システムの表象であるとする見方をとった。

渋谷勝己「文法変化と方言――関西方言の可能表現をめぐって」（『言語』27-7,1998.7）は，時間（世代差）・空間（地域差）・意味のネットワークという三要素からことばを捉える動態言語学を提唱している。社会言語学と言語学は対立的モデルだと考えがちであるが，その止揚を目指したといえよう。杉戸清樹「社会を立ち現われさせることば・社会言語学」（「言語観」）は，相互的・協働的社会関係が言語によって立ち現われるメカニズムを捉える見方が必要だとしている。

茂呂雄二「開かれたディスコース概念のために」（「射程」）は，「経験主義」からの離脱を解き，対話を研究対象とすることの意義を述べる重要な論文。茂呂は，社会とは無縁で発達もとげない主体が孤立的に対象理解を営む言語モデルが「経験主義」の描いたそれだとし，非対称で相互依存的な話し手と聞き手を一対の単位とする対話研究を進めることによってこそ新しい言語観が生まれると述べる。田中克彦「多言語主義と言語学」（『月刊言語』28-3,1999.3）が，多言語の問題は近代言語学の枠組みを根本的に破るような難問を含んでいるとしていることにも通じるだろう。

2.2　地域方言と社会方言については，『日本語学』が臨時増刊号特集「地域方言と社会方言」（18-13,1999.11，以後「地域と社会」）を組んだ。その中で馬瀬良雄「地域方言と社会方言」は，社会的背景の複雑化に即した言語研究が必要であると述べる。井上史雄「地域方言と社会方言の連続性――社会言語学の研究分野――」もまた都市化に伴って言語的差異の記述が地理上のプロットとしては捉えにくくなったと述べるが，それは地域方言を離れて即社会方言研究へと向かう姿ではないとするモデルは示唆に富む。バイダイアレクタルな社会の中で，地域方言がそのまま階層方言の様相を帯びること，性差は地域差との関わりで見る必要があることなどが例にあがっている。井上はまた，集団差は単語レベルの差異だとする定説にも異論を述べている。ところで位相の包括的研究として田中章夫『日本語の位相と位相差』（明治書院，1999.9）が上梓された。田中は同時代・同一言語的世界における差異や対立を位相とする従来からの見方に立ち，現象を記述した。

佐藤和之「方言学の研究の動向から――今後の方言研究の視点――」（「地域と社会」）は，個人史における方言使用の変化に言及した。また，方言間の関係観察は，日本語と他言語との関係を考察する視点へと連続しつつ発展すると述べている。ただし後者には異見があった。田中克彦「多言語主義と言語学」（前出）が，国家内の多言語と，多国間の多言語とは区別する必要があるとしている。庄司博史編『二〇世紀における諸民族文化の伝統と変容6　ことばの二〇世紀』（ドメス出版，1999.3）にも両者の意識があることをうかがわせる。実態観察に即しながら今後慎重に論議する必要に迫られるテーマのひとつとなろう。

2.3　今期は，学会誌『社会言語科学』第1巻第1号（1998.11，社会言語科学会編，年2回刊行）が産声をあげた。また，『植民地教育史年報』第1号（日本植民地教育史研究会運営委員会編，皓星社，1998.10），『ことばと社会』第1号（『ことばと社会』編集委員会編，三元社，1999.5）などの，国際化する日本語と言語問題を射程に収めた雑誌が創刊されている。なお，学史には小久保美子「「言語生活」概念の生成・展開過程」（『人文科教育研究』25，1998.8）があった。

3．位相・動態・方言接触

3.1　若年層のことばについては，三井はるみ「新しい方言と古い方言の全国分布――語彙――」（「地域と社会」）が，若い人に使用される方言語彙は併用が非常に多く，分布は重層的に織り成されていることを明らかにした。また，馬瀬良雄・中東靖恵・小西優香共編『首都圏女子大生のキャンパスことば――横浜・フェリス女学院大学――1998』（長野・言語研究会，1998.5）がまとめられた。永瀬治郎「語の盛衰――キャンパス言葉の寿命」（『日本語学・特集ことばの寿命』18-10,1999.9）は1994年と1998～1999年の調査を比較し，遊びの要素が少ない語の寿命は長いが，多くは三年から五年で変化していくことを述べている。

ほかに村野恭子「若者ことばの特徴――造語法を中心に――」（『東京女子大学言語文化研究』8,1999.10），中道知子「学生が知らないことば」（『大東文化大学紀要』37,1999.3），青木勝彦「埼玉大学学生用語集」（『埼玉大学国語教育論叢』2,1998.4）があった。また，高木千恵「若年層の関西方言における否定辞ン・ヘンについて――談話から見た使用実態――」（『現代日本語研究』6,1999.3），中東靖恵「若年層話者のガ行鼻音に対する意識――近畿以西，関東，東北，北海道地域出身者の比較――」（『岡山大学文学部紀要』32,1999.12）があった。

新語に関しては小矢野哲夫『ワードウォッチング――現代語のフロッピィ――』（私家版，1999.1）がまとまった。外来語については，松岡洸司「現代語の中にあらわれた外来語」（『上智大学国文学科紀要』15,1998.3）があった。

3.2　男性語・女性語については，尾崎喜光「女性語の寿命」（『日本語学』18-10，前出）が，女性にみられる断言しない行動様式は衰退しているものの，ぞんざいにならない言い方をするという行動様式の余命は長いと結論づけている。谷部弘子「大学生の日常談話の一断面と自己評価」（現代日本語研究会『ことば』20,1999.12）は，くだけた場面での男女差が小さくなる傾向にあること，下降調の終助詞「～の↓」が男子学生の使用語になりつつあることなどを指摘している。現代日本語研究会編『女性のことば・職場編』（ひつじ書房，1999.4）は，共同で作成した自然談話文字化資料およびそれを使用した論考。遠藤織枝「東京の女性のことばのいま」（『言語』27-1,1998.1）は，上記の資料を用いている。石井正彦「テレビの社会方言――単語使用の性差を見出す――」（「地域と社会」）は，テレビでの使用言語を分析した。

米川明彦『男と女の流行語』(小学館，1998.2)は，明治から現代までの男女に関わることばを取り上げた。索引付き。遠藤織枝「'98 中国女文字研究報告」(現代日本語研究会『ことば』19,1998.12)は，書き手の高齢化が進む中で，新たに出会えた71歳の書き手の女文字に関する詳細な報告。また，野元菊雄「近過去の女性名（その3)」(『文林』32,1998.3)があった。

3.3 待遇表現研究について。井上史雄『敬語はこわくない』(講談社，1999.5)は，現代敬語の大きな傾向に「敬意低減の法則」と「敬語の丁寧語化」があることを実証的に論考した。「敬語の西高東低」(『言語』28-11,1999.11)はその続。対者敬語化する傾向は東日本が先行し，若者のタメグチは東日本に広がる無敬語方言と同質の現象であると考察している。岸江信介「京阪方言における親愛表現構造の枠組み」(『日本語科学』3,1998.4)は，関西中央部の待遇表現には上下関係，親疎関係，親愛の三軸が作用していると考察した。永田高志「現代敬語における第三者に対する待遇表現」(『文学・芸術・文化』10-1,1998.12)は，明治前期東京語には相対敬語と絶対敬語が場面に応じて併存していたが，標準語教育によって前者が普及したと述べる。

敬語選択の意識に関しては，神鳥武彦・福島真司「敬語形式の選択に認められる話し手の許容期待度――広島方言話者を対象として――」(『佐賀大国文』26,1998.3)が，相手への心理的距離意識が敬語選択にどう影響するかを論じた。対人距離の地域差については尾崎喜光「対人的心理距離の東西差――東西の高校生の言語使用に見る――」(「地域と社会」)があった。西尾純二「マイナス待遇表現行動分析の試み――非礼場面における言語行動規範について――」(『大阪大学日本学報』17,1998.3)，同「マイナス待遇行動の表現スタイル」(『社会言語科学』1-1，前出)は，相手をマイナスに待遇するとはいかなる行動か考察しようとした。特集「敬語は何の役に立つか――日本語の未来と敬語の存在」(『言語』28-11,1999.11)が組まれている。

3.4 動態研究については，井上史雄『日本語ウォッチング』(岩波書店，1998.1)が，言語変化の最前線にある現象をとりあげ，言語内的要因と言語外的要因の双方から目配りをきかせて8章にまとめあげた。東京の話しことばが地域語からの影響を受け続けながら強力な威信の発信源となっている現代の様相をグロットグラムや言語地図を駆使しながら動態のままとらえきっている。

真田信治「江戸語はいつ共通語になったか」(『言語』27-1,1998.1)は，「本江戸」を，厳密には武士階層におけるスピーチスタイルの一種と解釈すべきだとする好論。これが今日の共通語となったとするもので，一種のクレオールとみられる江戸訛りは地域語の域を出ず，共通語の母体とはなりえなかったとしている。

現代東京語の規定は首都である東京の言語と考えておくだけで足りるとする柴田武「東京語とは何か」(『言語』27-1，前出)のような考え方もあった。『言語』27-1は，「「東

京語」論――誰が「東京語」をつくったか」を特集に組んでいる。なお，話しことば資料の信頼性に関しては清水康行「速記は「言語を直写」し得たか――若林珀蔵『速記法要訣』に見る速記符号の表語性――」(『文学』9-1,1998.1) があった。中井精一「フィールド言語学と調査データ――田辺市における方言調査をもとに――」(『地域言語』10,1998.10) は，調査法と得られるデータとの関係について考察した。

3.5　共通語と方言の接触に関して。真田信治代表『九州におけるネオ方言の実態』(科研成果報告，1998.3) は読み応えのある報告書。吉岡泰夫，陣内正敬，有元光彦，二階堂整，村上敬一，太田一郎，岸江信介の7氏が執筆している。太田一郎「地域語変化の方向性と言語意識」(鹿児島大学法文学部紀要『人文学科論集』47,1998.2) は，鹿児島市についての調査結果。早野慎吾「首都圏の新方言形チッタ」(『名古屋・方言研究会会報』16,1999.5) が，同じ「チッタ」形でも，高年層は伝統方言，若年層は首都圏から伝播した新方言という，北関東・松戸における興味深い状況を指摘している。

「気づかない方言」については，木川行央「方言話者の考える共通語――関西方言における条件表現から――」(『ことばから人間を』昭和堂，1998.6)，原野亮子「気づかれにくい方言「会議があっています」について――その共通語意識――」(『北九州大学文学部紀要』56,1998.7) があった。篠崎晃一代表編集『依頼表現の変容と地域差の研究』(私家版，1999.10) は，準備調査報告。沖裕子「気がつきにくい方言」(「地域と社会」) は，文法研究などとの関連も指摘しつつ，学史と研究的意義をまとめている。

大阪樟蔭女子大学『日本語研究センター報告』(6,1998.6) は「小笠原諸島の言語文化」を特集した。ダニエル・ロング「小笠原諸島における言語接触の歴史」は，欧米系島民にみられる小笠原クレオール日本語の形成モデルを探究している。諸外国語との接触に関する研究として今後の発展を期待したい。

年齢差と関係しては鏡味明克・新良智子・岩田千晶・小野田良香「三重県アクセントの年層変化――松阪・四日市・桑名および桑名周辺について――」(『名古屋・方言研究会会報』15,1998.5)，山田達也・正木悦子「名古屋地方における大学生のアクセント」(『名古屋・方言研究会会報』16，前出) が，アクセントの推移について考察した。また，佐藤亮一「社会方言としてのアクセント――世代差を中心に――」(「地域と社会」) は，地域によるアクセントの共通語化の違いを描写し，合わせて場面差に留意した調査方法の必要性を指摘している。吉岡泰夫「共通語化と社会方言」(「地域と社会」) は，若年層では発話の丁寧さの判断に終助詞よりもイントネーションが影響することを述べ，地域の伝統的方言語彙が情報伝達の手段として機能しなくなる動静に触れた。各地の地域方言と社会方言に関する実態を，小野米一 (北海道)，半沢康 (東北)，丹羽一彌 (中部)，陣内正敬 (関西)，友定賢治 (中国・四国)，木部暢子 (九州) がそれぞれの切り口からまとめている (「地域と社会」)。言語地理学的に方言社会を考察した論には大川泰子「社会と言語」(『目白学園女子短期大学』36,

1999.12）があった。

3.6 集団語について。沢木幹栄「専門領域の方言」（「地域と社会」）は専門家方言を4種のタイプに分け，コンピュータ用語辞典にはのっていない専門語について述べている。また平沢啓「運送会社の命名法」（和歌山大学教育学部紀要『人文科学』49,1999.2），村上敬一「公共交通機関の方言――大都市圏鉄道各社の具体例に基づいて――」（「地域と社会」）があった。松本修「キレる・ムカつく考――大阪の芸人がテレビで広めた言葉――」（「地域と社会」）は，語の意味・用法が変化する瞬間をつぶさに観察し，描写した。渡辺友左「日本方言親族語彙の言語社会学的研究(1)」（『中京大学社会学部紀要』12-2,1998.2）は，『日本方言親族語彙資料集成』から何が分かるかという問いかけに対して書かれている。遠藤織枝「高齢者の話し方は遅くてわかりにくいか――話しことばの世代差をみる試み――」（『現代日本語研究会』20，前出）は，実態に迫ろうとした考察。

3.7 外国語を母語とする人の日本語使用に関する研究は多数あったが，その中から渋谷勝己「中間言語における可能表現の諸相」（『阪大日本語研究』10,1998.3），日比谷潤子「長母音短縮現象――日本語学習者の自然談話資料の分析――」（『日本語と日本語教育』28,1999.3）をあげる。

4. 言語行動・言語選択

4.1 会話という言語行動について。社会言語学の重要な課題に談話研究が含まれるのは，話し手と聞き手からなる最小の社会（ミクロな社会）における言語行動を対象とするからである。杉藤美代子・Nagano-Madsen, Yasuko・北村美穂「自然な談話における「繰り返し応答」のパタンとタイミング」（『文法と音声II』くろしお出版，1999.6）は，強く印象に残った。「繰り返し応答」のタイミングには複数のパタンがあり息継ぎに要する最短の時間より短い例もあること，数名の話者によって次々と発話される繰り返しは約2～3秒の短い時間内におさまり談話の盛り上がりを作っていることなどを明確にしている。イーミックな談話文法研究が多い中で，エティックなレベルで談話を観察した上記の研究は異彩を放っていた。

これと同じ研究態度を持つ好論に，西澤弘之・宮田 Susanne・矢冨直美・宇良千秋「「相づち」再考――幼児と痴呆性老人に於ける「相づち行動」についての探索的研究――」（常盤大学人間科学部紀要『人間科学』16-1,1998.10）がある。心理学系の研究者が，言語学の成果を生かして相づちを「文内相づち」と「文後相づち」に分け，幼児と痴呆性老人のあいづち行動からあいづちの本質に迫っている。幼児については，世界的な蓄積が進んでいる幼児話しことばデータベース CHILDES を使用し，タグづけを論者自身の手で行っている。成人の複雑な会話にそのまま適用できるかどうかは別として，自然談話の文字化資料作成とその活用に関しても学ぶところが多い。なお，白井純子・白井英俊他「幼児の「聞き返し」

――縦断的事例研究――」(『社会言語科学』1-2,1999.3) も，JCHAT/CHILDES 形式で書き起こした文字化資料を用いている。

4.2 マクロな社会におけるインターアクション研究については，北田暁大「≪観察者≫としての受け手――ルーマン・社会システム論的視座からの，「メディア論」および「メディア・リテラシー」概念の再検討」(『マス・コミュニケーション研究』53,1998.7) に注目した。現代の情報化時代においては，メディアの受容空間に能動的に参画していく受け手の力を解明していく必要があるという主張である。こうした考え方に立つと，木村忠正「「次の 10 件」に気付かない学生たち――メディアの文法とネットワークへの受動的意識構造――」(「複雑化」) がよく理解できる。是永論「「メールのやりとり」という行為はいかにして可能か――総合行為的実践としての CMC の分析」(『マス・コミュニケーション研究』54,1999.1)，宮田加久子「コンピュータ・コミュニケーション――個人が情報を生産・発信することの意味を再考する」(『同上』52,1998.1)，辻大介「言語行為としての広告――その逆接的性格」(同上) も，コミュニケーションの送り手と受け手に着目した興味深い論考で，言語学が「異質な人間同士のミクロ/マクロ社会における言語行動」というモデルを描ききっていない現状に対して，こうした社会学，文化人類学が言語行動の動態によく踏み込んでいるように思えた。

半沢康「方言使用と方言評価意識に関する因果分析の試み――東北地方南部高校生アンケート調査の結果から――」(『国語学研究』37,1998.3) は，評価意識と方言使用には双方向の因果関係があることを共分散構造分析を用いて解明し，これまでの仮説の再検討を促している。敬語行動については，杉戸清樹「変わりゆく敬語意識――敬語の役割を考えるために」(『言語』28-11，前出) があった。江端義夫「あいさつ交換儀礼の研究」(「地域と社会」) は，あいさつ行動に即しながら，社会変化に伴った心や態度の変容の問題にも踏み込んでいて興味深く，一筋縄ではいかない重要な問題を提起している。

言語環境については，鳥越隆士「ろう者集団に属するろう者の情報へのアクセスとネットワーク」(『ろう教育科学』41-2,1999.7)，富田英典「若い世代とメディア環境」(『マス・コミュニケーション』52，前出)，紅林伸幸他「現代若者のコミュニケーションスタイルに関する考察――メディアツール・コミュニケーションと友達/恋人関係の現在――」(『滋賀大学教育学部紀要人文科学・社会科学』48,1998.3) があった。須賀一好「俳句の文法について考える――潜在的多重構造としての俳句の分析――」(『山形大学日本語教育論集』1,1998.3) は，俳句を「日常的な談話や文章の特徴を極端に煮詰めたもの」という視点から捉え，立論した。三宅和子研究代表『実況放送におけるフレームと視聴者の快・不快との関係を探る社会言語学的研究――オリンピックのマラソン放送の談話分析を通して――』(1999.3) は科研成果報告。

4.3 談話の構造的研究には以下の諸論があった。柴田正「昔話の変容と定着」(『山形短期大学紀要』31,1999.3) は，明治以降文字化された昔話が小学校教科書に採用されたこと

で，口承伝承としてあったモチーフや話型が変容したことにふれている。野村雅昭「続・落語のレトリック(10)～(15)」(『日本語学』17-1,3—7,1998.1—6) は，トリチガエの話の構造と解釈に関する考察。また，村上恵「「道順説明」における参照点機能と表現類型——地図の図形認知に基づいた異なり——」(『三重大学日本語学文学』9,1998.6)，野山広「感謝の挨拶に関する民族誌学的一考察——披露宴のスピーチアクトを事例として——」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』43,1998.2) があった。陣内正敬「関西地方の地域方言と社会方言」(「地域と社会」) も，道教え談話を扱っている。

杉村孝夫「田川郡香春町炭坑ことばノート」(『福岡教育大学国語科研究論集』40,1999.1) はあっさりと書かれているが，語の意味の理解と談話との関係についての示唆が興味深かった。あいづち研究に関しては，三宅和子「談話における「はい」の機能——応答詞としての「はい」からリズムとりの「はい」まで——」(『東洋大学短期大学紀要』30,1998.12)，ヤスコ・ナガノ・マドセン/杉藤美代子「東京と大阪の談話におけるあいづちの種類とその運用」(『日本語科学』5,1999.4) があった。

雑誌の特集として，『国文学 解釈と教材の研究』が「あいさつことばとコミュニケーション」(44-6,1999.5)，『言語』が「読む」(27-2,1998.2)「手話の世界」(27-4,1998.4)，『日本語学』が「うわさ話」(17-1,1998.1)「翻訳」(18-3,1999.3)「これからの談話研究」(18-11,1999.10) を編んでいる。

4.4 外国人あるいは対外国人の言語行動に関しては，オストハイダ・テーヤ「対外国人言語行動と言語外的条件の相互関係」(『大阪大学日本学報』18,1999.3)，熊崎さとみ「日系ブラジル人の言語行動に関する一考察——「断わり」と「受け入れ」の場面について——」(信州大学人文学部紀要『人文科学論集』32,1998.3)，合津美穂「日本統治時代における「台湾人」の日本語使用——「台湾人」駅員に対する日本語使用の事例を中心に——」(長野県ことばの会『ことばの研究』10,1999.10) があった。桶谷仁美「アディティブ・バイリンガルのすすめ」(『日本語学』18-2,1999.2) は，カナダ(トロント)における日本人子弟(20～30歳前後，42名)の研究である。

4.5 談話文字化資料として以下の労作が公開された。中井幸比古『方言会話資料(1) 京都(1)』(科研成果報告，1999.3)，山口幸洋編・監修『NHK全国方言資料研究テキスト(4)』(非売，1999.11)，金沢裕之『二代目桂春団治「十三夜」録音文字化資料』(科研成果報告，1998.9)。金沢には上記を使用した「二代目桂春団治「十三夜」における「さん」と「はん」の使い分け」(『地域言語』10,1998.10) がある。

4.6 訳書も含め，今期も談話分析に関係した入門書は多かった。好井裕明・山田富秋・西阪仰『会話分析への招待』(世界思想社，1999.2)。橋内武『ディスコース——談話の織りなす世界——』(くろしお出版，1999.4)。マルコム・クールタード著，吉村昭一・貫井考典・鎌

田修訳『談話分析を学ぶ人のために』(世界思想社, 1999.1)。ヤン・レンケマ著, 中村則之訳『伝わることば――談話コミュニケーションの基礎知識――』(関西大学出版会, 1998.1)。ジョージ・サーサス著, 北澤裕・小松栄一訳『会話分析の手法』(マルジュ社, 1998.11)。ジェニー・トマス著, 浅場亮一訳監修『語用論入門――話し手と聞き手の相互交渉が生み出す意味』(研究社, 1998.5)。

邦訳がなかったポール・グライス『論理と会話』が訳書として刊行された(清塚邦彦訳, 勁草書房, 1998.8)。また, デズモンド・モリス『ボディートーク――世界の身ぶり辞典――』(三省堂, 1999.7) が, 訳出された。訳者の東山安子には「身振り辞書の試み――その現状分析と日本人の身振りの使用法に関する調査報告――」(『明海大学外国語学部論集』11,1999.3) がある。

5. 言語意識と言語政策・言語計画

5.1 ことばからみた社会意識・規範意識について。『日本語学』(18-14,1999.12) は「気になることば」を特集した。また, 陣内正敬『日本語の現在(いま)――揺れる言葉の正体を探る』(アルク, 1998.11), 尾上圭介『大阪ことば学』(創元社, 1999.3), 遠藤織枝『気になります, この「ことば」』(小学館, 1998.12) が上梓された。高木正幸『差別用語の基礎知識'99』(土曜美術社出版販売, 1999.7) もあった。

島田久美子「日英語にみられるジェンダー――新聞人物紹介欄の人物描写の表現から――」(『東京女子大学言語文化研究』8,1999.10) は, 批評言語学的研究。山田小枝「辞書表現に見られる女性」(千葉大学『人文研究』27,1998.10) は, 幕末前後と大正前後とを比較している。佐竹久仁子「「女ことば/男ことば」規範をめぐって」(『ことば』19, 前出) は, 東京方言の「男ことば, 女ことば」をもって日本語一般に男女差があるとされていることが, 規範意識を強化するひとつの要因になっていると述べる。

5.2 ことばに対する知識や感じ方について。ダニエル・ロング「日本の方言認知地図選考地図集」(『日本語研究センター報告』5,1998.1), 鏡味明克「東海地域の方言・地名の意識についての研究」(愛知学院大学人間文化研究所紀要『人間文化』14,1999.9) は, 話者の評価と認知を意識調査から探った。日高貢一郎「方言の復権」(「地域と社会」) は, 方言そのものに対する人々の意識の変遷を多角的に探っている。

呼称とその使用意識に関する研究が今期は多かった。『日本語学』(17-9,1998.8) は,「人の呼び方」を特集した。尾崎喜光「生徒たちはどう呼ばれたいと思っているか」は, 呼称が当事者間の対人関係を大きく変える力を持っているとし, 実際に教師にそう呼ばれている生徒たちの受け止め方をアンケート調査によって報告している。姜錫祐(韓国), 水野マリ子(中国), 佐々木倫子(英語), 堀江インカプロム・プリヤー(タイ) は, 日本語との対照研究を行っている。田中ゆかり「大学生の呼称――場面・上下・性の異なる相手からの呼ばれ方――」(『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』7,1999.12) は, 呼ばれ方を16場

面について調査し，呼称使用の制約が強い場面と，自由な場面とに分けた。福島直恭「言語行動としての旧姓使用」(『国語国文論集』27,1998.3) は，旧姓使用という行為を文体選択行為と対比させて述べ，発話者の「アイデンティティー管理」の手段として位置づけた。一方ジョン，C. マーハ「夫婦別姓：日本における結婚と姓名変更の政策について」(『社会言語科学』2-1，前出) のように，呼称選択は慣行やシステムに対する意識を表明するイデオロギー的行為であるとする説もあった。

佐藤和之・米田正人編『どうなる日本のことば――方言と共通語のゆくえ』(大修館書店，1999.12) は，同一調査票を用いて国内 14 地点の言語意識を尋ねた大規模調査。ネイティブとノン・ネイティブの意識を対比させながら，地域別年層別に現代日本語に関する意識の多様性をグラフを添えて描き出している。大野眞男「沖縄県平良市における活躍層の言語意識――那覇市と対比して――」(『岩手大学教育学部年報』59-1,1999.7) では，沖縄県内の地域差がよく捉えられている。大規模調査には，文化庁『平成 9 年度国語に関する世論調査』(大蔵省印刷局，1998.4)，『平成 10 年度同上』(1999.4) があった。

国内在住の日本語を母語としない人の言語意識研究には，伊藤宏美「来日中国人の日本語使用意識について」(『学習院大学国語国文学会誌』41,1998.3)，後藤典子「外国人に対する地域語使用の実態例と外国人による地域語認識の実態――地域語を使用した外国人場面のコミュニケーションのために――」(『山形大学日本語教育論集』2,1999.3) があった。

5.3　国際間における対日本語意識について。『日本語学』(18-4,1999.4) は，特集「国際社会の日本語」を組んでおり，江川清・米田正人「日本語観国際センサス」が，28 ヶ国を対象に行った調査結果をまとめている。日本からの距離に従って対日本語意識は変化し，近隣の環太平洋諸国は自国語の次に重要なのは日本語であると答えていることなどが明らかにされている。

上記の調査は，1994 年から 1999 年度までの 5 年間にわたった新プログラム研究「国際社会における日本語についての総合的研究」に基づいている。42 冊の成果報告書になって刊行が完了した。全体像は，事務局の手になる「新プロ「日本語」ニューズレター」(1―7,1994.10―1999.1) によって簡便に知ることができる。また，『第 6 回国立国語研究所国際シンポジウム　国際社会と日本語報告書』(国立国語研究所，1999.9) でも概要が分かる。調査結果の分析に加えて，国際社会において日本語が占めるべき位置についての論考や，国際調査に関する方法論も収められている。林知己夫「調査とデータの科学」では，国際比較調査法の測定誤差は 10%程度見込む必要があると述べられており，調査法に関する有益な教示が含まれている。

5.4　言語政策・言語計画について。文化庁『国語審議会報告書 21』(大蔵省印刷局，1998.11) が刊行された。『社会言語科学』(2-1，前出) は，特集「日本の言語問題」を組んでい

る。渋谷勝己「国語審議会における国語の管理」がその中で，第19期から21期までの国語管理のありかたについて述べている。

宮島達夫「展望論文　言語政策史研究」(『社会言語科学』2-1，前出) があった。近代以降の言語政策史は，国語(日本語)教育とは切り離せない。言語研究の立場から，酒井恵美子「『台湾教科用書　国民読本』の編纂と公学校教科用図書審査会」(1998.12，『台湾総督府文書第五巻』解説，ゆまに書房)，中田敏夫「台湾総督府国語学校生徒執筆「内地旅行日記」(大正元年)」(愛知教育大学大学院『国語研究』6,1998.3) などの基礎資料の蓄積がみられた。戦前の国語政策に関する論考には安田敏朗『「言語」の構築』(三元社，1999.1)，同『〈国語〉と〈方言〉のあいだ——言語構築の政治学』(人文書院，1999.5) があった。後者のテーマには，国内の多言語と多国間の多言語の分別の問題が絡んでいる。ほかに長志珠絵『近代日本と国語ナショナリズム』(吉川弘文館，1998.11) があった。また，安田敏朗による解説を添えて，平井昌夫『国語国字問題の歴史』(三元社，1998.2) が復刻された。

6. 応用言語学

6.1　日本在住の外国人に対する，緊急時の日本語表現について。『言語』(28-8,1999.8) は，特集「緊急時のコミュニケーション——命綱としてのことば」を組み，柴田武「「緊急言語」を“保険”のつもりで——応用言語学の課題」，佐藤和之「震災時に外国人にも伝えるべき情報——情報被災者を一人でも少なくするための言語学的課題」が論じている。佐藤和之は実際に以下の2冊を世に送った。『災害が起こった時に外国人を助けるためのマニュアル(弘前版)』(弘前大学人文学部，1999.3)。『災害時に使う外国人のための日本語案文　ラジオや提示物などに使うやさしい日本語表現』(新プロ「日本語」成果報告，1999.3，「災害時の日本語」研究グループ編集・制作)。

6.2　国語教育におけるコミュニケーション教育について。『日本語学』が以下の特集を組み，関係した論考を収めている。「論理的作文の表現」(17-3,1998.2)「これからのコミュニケーション」(17-8,1998.7)「「生きる力」としての日本語」(18-8,1999.7)「臨時増刊号　21世紀への提言　国語教育の改善に向けて」(17-2,1998.1)。

6.3　日本語教育における応用的研究について。エレン・ナカミズ「ブラジル人就労者における日本語の動詞習得の実態——自然習得から学習へ——」(『阪大日本語研究』10,1998.3) は，ブラジル人就労者の職場における日本語の自然習得を問題にしていて興味深い。自然習得と教室学習とが個人の言語習得の過程でどう位置づけられるか，解明が待たれる多角的テーマである。トムソン木下千尋・舛見蘇弘美「海外における日本語教育活動に参加する日本人協力者——その問題点と教師の役割——」(『日本語教育論集　世界の日本語教育』9,1999.6) は，地域社会での言語習得行動における協力者の役割を考察している。

高木裕子・後藤典子・山上龍子・渡辺文生・佐々木範子・趙恩嬉・林美和「山形市在住留学生に対する地域語教材」(『山形大学紀要（人文科学)』14-1,1998.1)，高木裕子「定住外国人に対する「地域共通語」の扱い」(『山形大学日本語教育論集』1,1998.3) は，地域語の観点から日本語教育活動を捉え直した。『異文化間教育』(13,1999.6)は，「留学生支援システムの最前線」を特集に組んでいる。

細川英雄編著『日本語教育と日本事情――異文化を超える――』(明石書店，1999.10) は，日本事情教育は地域に在住する人々との接触行動を通した発見的・体得的過程にあることを論じている。また長谷川恒雄・佐々木倫子・砂川裕一・細川英雄を編集兼発行人とする『21 世紀の『日本事情』――日本語教育から文化リテラシーへ』創刊号（くろしお出版，1999.10) が発刊された。レスリー・M. ビービ編，島岡丘監修の入門書『第二言語習得の研究――5 つの視点から』(大修館書店，1998.7) は，「社会言語学的視点」を立てている。

7. 今期の特色

以上展望してきたところから，今期の特色を次のようにまとめておきたい。

（1） 構造主義的な言語観を超え，話し手と聞き手の相互関係からなる言語使用の解明を目指した言語観の模索が始まった。

（2） 意味・文法と言語使用を包括的に捉えようとする言語観が今期もみられた。

（3） 位相研究は今期も活発であった。位相を固定的な実態とは捉えず，変化を内包している姿として捉え，位相研究と動態研究が協調する傾向が今期も続いた。

（4） マクロ/ミクロな社会における言語使用・言語行動の解明が，学際的に行われる兆しをみせた。ただし提携の動きは弱く，文化人類学，社会学，心理学，社会心理学，言語学などで，他領域をやや意識したそれぞれの取り組みがみられた。

（5） 世界の多言語状況における日本語の位相的位置づけを探る研究が現れた。

（6） 社会言語学を基礎とした応用的な研究が国語教育，日本語教育にみられた。

研究動機は人があってこそ成立し，それによって新しい知見がもたらされる。日本の社会言語学の母体となった言語地理学を日本に「移植」された W. A. グロータース神父，方言学から出発し社会言語科学会という松を栽えたばかりの徳川宗賢氏が，相次いで身罷った。謹んで哀悼の意を表するとともに，更なる一歩を苦心して踏み出すことが両先生の学恩に報いる道だと考えたい。

遺漏については大方の御海容を乞う。稿を成すにあたって，国立国語研究所の新野直哉氏，井上文子氏にご配慮賜り，同図書館の綱川博子氏にはひとかたならずお世話になった。記して心から感謝申し上げます。

――信州大学助教授――